むのたけじ地域・民衆ジャーナリズム賞を終了いたします

2023 年 12 月 24 日

共同代表　落合恵子　鎌田慧　佐高信　永田浩三

2023 年もまもなく終わります。パレスチナでの市民への虐殺やウクライナでの戦争、政治資金「疑獄」化などのニュースにわたしたちは胸がつぶれる思いです。

今こそジャーナリズムの役割、「地域・民衆ジャーナリズム」地域からの発信に光を当てるジャーナリストの発掘の重要さをかみしめております。

わたしたち「むのたけじ地域・民衆ジャーナリズム賞」実行委員会は、地域に立脚しながら、暮らしといのちを見つめ、二度と戦争の時代を繰り返さないために声を上げ続けたむのたけじの「たいまつ精神」を活かし、地域から発信するジャーナリストたちを掘り起こし顕彰する「むのたけじ地域・民衆ジャーナリズム賞」を 5 回にわたり続けてまいりました。

新聞、出版、地域紙、ドキュメンタリー映画、SNS などの領域で、これまで 29 の個人および団体に賞を選考してきました。今年度もまた第 6 回に向けて、全国から作品を募り、来年 1 月には、受賞者の最終の選考会を行い、受賞作品を決定する準備に入る予定でした。

しかし 2023 年 6 月、昨年度の受賞者である「なくそう戸籍と婚外子差別・交流会」の方から、一通のお手紙をいただいたことで、思いもかけない展開が生まれました。

1979 年 9 月に北海道新聞労働組合が主催した、むのたけじさんを招いた講演会でのことです。むのさんは講演の中で、地域で生きる重度障がい者、三井絹子さんの出産のことを、病院の看護婦長の言葉を引用するかたちで紹介しました。

以下は、むのさんの発言の一部です。

「事実を事実のものとして、ナマの姿で伝えるにはどうするのか。そのことで権力との関係を作らなきゃならぬと同時に大衆とも作っていかなきゃならぬじゃないか。一週間前に八王子に行った時、朝日新聞をやめたといきまいている女の人がいました。なんだと思ったら、八王子の近在のなかで、重い障害の、下半身がほとんど動かない女の人が、子供を産んだわけです。相手の男性も障害者です。それを何か美しいことのような、そして女の人を持ち上げて、病院が彼女のいい分を聞かないという事を書いているわけですが『こんなもの読むものか！！』と怒ったのは、その病院の看護婦長でしてネ。いかにこの患者が、身の程知らずのわがままを言うのか。こんな体で妊娠したときにどんなことが起こるのか、ということを医者にも相談しな

い。親、兄弟にもしゃべっていない。要するに、性生活をすれば生まれるんだ。生まれたとたんにオレは重度身障者だ。一軒の家をよこせ、車買え、とかネ。あてもないことを言う。心身に痛手を持つ人たちを十分いたわらなきゃならぬ。そりゃあ原則はわかる。けれど、原則論で『私は大変な痛手を受けた人間です』ということを武器にしてわがままを言うことに目をつぶって、一種の美談めいたものにすり替える朝日はウソつきだ。平気でウソをつける。こういう言い方で、どんなウソをほかでついてるかわからない。あと読まぬと言うて、社会教育の集会に出てきて、新聞の問題出たときにしゃべっておったんですが・・・」

これだけではよくわかっていただけないと思います。むのさんは、講演の中で、三井さんの出産を取り上げた朝日新聞の記事について、美談としてではなく、医療者からの批判的な意見についても取り上げるべきだと語りました。記事を書いたのは、むのさんが戦争中に身をおいていた朝日新聞の後輩にあたる松井やよりさんです。当時は立川支局長としてこの問題に関わっていました。

むのさんの発言をめぐっては、北海道新聞で講演を聞いて問題にした女性記者や三井絹子さんを支援する方たちや松井やより記者から、厳しい批判とともに、発言の趣旨について説明をもとめる手紙がむのさんに送られましたが、むのさんからの誠意のある回答や対応はありませんでした。

今回寄せられたお手紙や当時の資料を添付し、わたしたち共同代表へのコメントを求める件をどう受け止めればよいのか、わたしたち共同代表と賞の事務局は 6 月以降、検討を続けてまいりました。

共同代表一同、北海道新聞労働組合主催の講演でのむのさんの発言には正直驚きました。むのさんは、戦後一貫して人権に関して啓発的な発言を続けてこられた方です。新聞「たいまつ」は、日々の暮らしを尊重し、人間らしく生きることが綴られた地域ジャーナリズムのお手本となってきました。そんなむのさんの発言が行われたのは 1979 年のことです。この時代、障がい者の問題はどのような展開を見せていたのでしょうか。実は、障がいがある人が社会の中で尊重されその人らしく生きていくことを訴える当事者の運動はすでに 1960 年代から始まっていました。その中で先駆的な役割を果たした「青い芝の会」の運動は、「脳性マヒ者が生まれ育った家や施設を出て、生活保護を権利として受けながら地域社会で生活する」という生活スタイルを東京を中心に実践し、70 年代半ばに入ると 7 9 養護学校義務化反対や全国障がい者運動など全国各地に広がっていきました。

先日亡くなられた脚本家・山田太一さんの名作ドラマ『男たちの旅路・車輪の一歩』は、車椅子の利用者が声を上げ、当たり前に生きていく権利であることや、障がい者の性の悩みの深刻さを訴え、バリアフリーへの取り組みを積極的に後押しする役割を果たしました。むのさんの発言は、山田太一ドラマとまさに同じ頃になされたのです。

70 年代後半、日本社会における障がい者への無理解や偏見がまだ根強く残っていたことは確かです。障がい者が出産することで、医療福祉の従事者の負担が増える。むのさんが引用したとされる婦長の発言はそうした意識の中で生まれたものでしょう。ですから、当時の感覚で言

えば、特別なものであったとは言えません。しかし、むのさんの発言の趣旨は、重度の障害がある子どもを産むことは許されないと言っているように読めてしまうのです。これは、すでに障がいがある当事者の運動があふれていた状況下として、ジャーナリストとしても感覚の鈍さや不勉強を厳しく批判されても仕方がありません。そしてその上発言を問題にした女性の方々へのその後の対応についてやはり彼女たちに向き合っていなかったと思います。

むのたけじさんは、戦前、戦中、戦後を通じ、100 歳を超えても現役ジャーナリストであり続けました。日本のあまたのジャーナリストのなかで、ただひとり戦争の時代の従軍記者としての記事の責任をとり、朝日新聞を退社し、地域のため民衆のために筆を執り続けました。

むのさんが遺した言葉にこうした一節があります。「人間のいるところはどこでも教室である。自分で落としたモノは自分で拾おうとする努力こそが尊い」。今回の発言がなされたのは、むのさんが 64 歳の時です。もし、発言をめぐって対話が生まれ、むのさん自身がまた新たな成長を遂げておられたらと思うと、残念でなりません。

実は、わたしたち共同代表は、1979 年になされたむのさんの発言やその後の対応について、まったく知りませんでした。当時、障がい者問題に取り組む人たちの間では話題になっていたにも関わらず、われわれ自身が関心を抱くことはありませんでした。むのさんの発言は、当時も今も許されないことです。それは間違いありません。しかし、当時のむのさんの発言に注意を払わなかったわたしたちにも同じように責任があります。

わたしたちは考えました。今回のことは、むのさんに責任を負わせるだけではなく、むのさんの名前を冠にし、その名前のもとに賞を選考してきた共同代表もまた責任を負うべきなのだと思います。不明を恥じるべきはわれわれも同じではないでしょうか。

差別に向き合うことは当時も今も大変根元的な意味を持っています。

わたしたちの中にある「むのたけじ」を偶像、神格化してきてしまったこともこの課題から問われました。

わたしたちは、どのような責任をとればよいのでしょうか。議論の中で、共同代表の意見はいくつかにわかれましたが、従来通り賞を存続させるという意見はありませんでした。むのさんの冠をはずして、「地域・民衆ジャーナリズム賞」だけにするという案も出ました。しかし、責任をとるべきは、むのさんだけではないのは、先ほど申し上げた通りです。

わたしたちの結論はこうです。むのさんの名前をいただいた、「むのたけじ地域・民衆ジャーナリズム賞」はここで終わりにいたします。

申すまでもありませんが、今回の決断があったからといって、これまで第 1 回から第 5 回に受賞された方々の業績にいささかも傷がつくものではありません。

賞の主催者は参加された皆さまです。

今回の決断により、「むのたけじ地域・民衆ジャーナリズム賞」がその歴史を閉じることは痛恨の極みです。これまで受賞された方々、応募してくださった方々には、ここに深くおわび申し上げます。また、今回お手紙を下さり当時の資料や発言、問題点を時間をかけ掘り起こし、

1979 年のむのさんの発言以来長い間この問題に思いを引き継いできて下さった当事者の皆さまと昨年度の受賞者「なくそう戸籍と婚外子差別・交流会」の皆様にも改めておわびを申し上げます。

「地域・民衆ジャーナリズム賞」の今後につきましては、実行委員会でこの見解をもとに検討して参ります。

※タイトルの枠や文字の色付け、文字の強調は編集によるものです。